

二 学区の移り変わり

(一) 大むかしのくらし

一万年前の氷河時代が終わつた後を、沖積世とよんでいます。そのころの矢作川は、現在のように一本の川でなく、いく筋かに分かれて流れ、土や砂をおし流し、積み重ねながら、矢作川の両側の低い平野を形づくりつきました。そして、この低地を見おろす小針、橋目中町、北野の台地は、野草や木の茂つた森林であつたと思われます。

この台地に、大むかしの人々が使つた生活の道具が数多く発見されています。



大むかしの人々のくらしのようす（想像図）

場所	出土した石器の種類
小針	石矢じり、石おの
橋目中	石矢じり、石おの、石ぼう
北野	石矢じり

次^きの表^{ひょう}や写真^{しゃしん}のよう^うに今から約五千年^{やく}前^{まへ}に使つた石^{せき}器^きでは、石矢^{せきや}じり（矢の先につけ、けものをとるも^のの）石おの（木を切るもの）、石ぼう（ものをくだくもの）、などが出土^{しゆつ}しています。これらの石器の発見から、当^{とう}時^じの人々^{まなび}は、弓矢^{ゆきや}を使つてシカやイノ

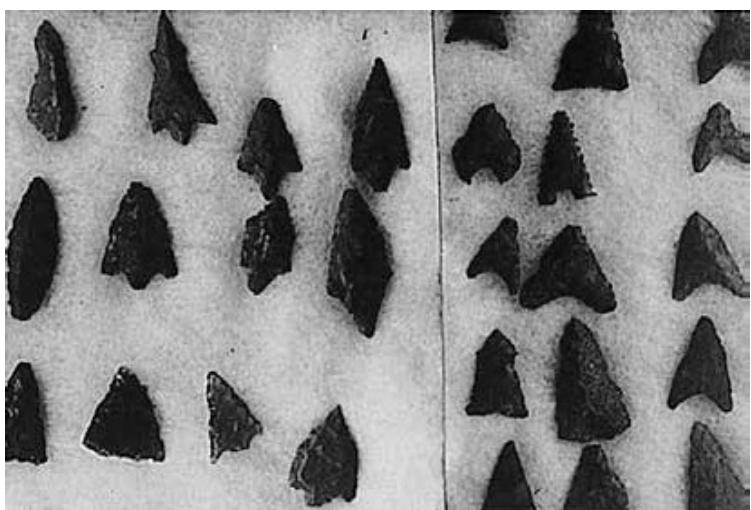
台地から発見された石器

ングリ、シイなど）の採集でくらしをたてていたことがわかります。そして、えものを求めて、時おり碧海台地の矢しながら生活していました。

大陸から日本に稻作の技術が伝わる
業が始まりました。狩りや漁の生活か

えものを求めて、時おり碧海台地の矢作川ぞいに、住まいを移動しながら生活していました。

大陸から日本に稻作の技術が伝わると、しだいに米づくりの農業が始まりました。狩りや漁の生活から、一か所に住む場所を決



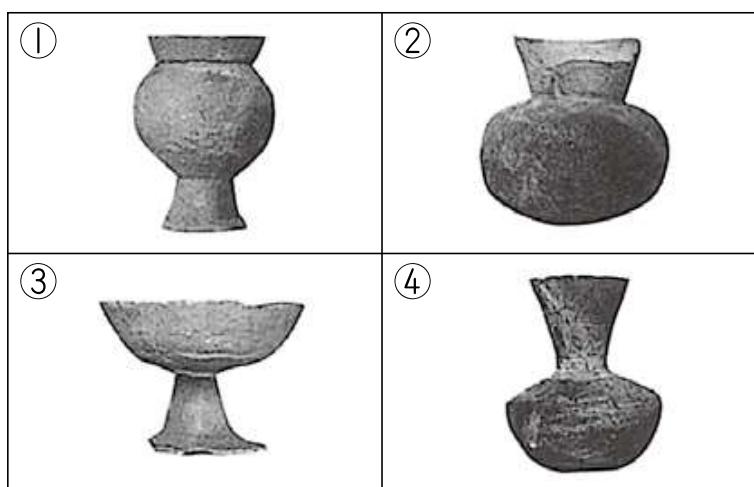
矢 じ り (橋目中・伊奈義文氏 蔵)

めて安定した生活ができるようになりました。北野町や橋目中町・小針町に連なる碧海台地と沖積平野の境めに住居をもち、小さな「ムラ」をつくつて、集団で低地での米づくりを始めました。このため、わたしたちの学区では、弥生時代の遺物が数多く発見されています。

橋目中町や小針町からは、たくさんの中の土器のかけらが出ました。弥生時代後期のものです。

これらの土器のほとんどは、台地のはしと低地に集まっています。このことは、狩りや漁、木の実、草の実にたよっていた生活から米づくりを中心とした生活に変わり、それにともなって人口も増え、「集落」も多くなつたことを示しています。

小針や橋目で発見された土器



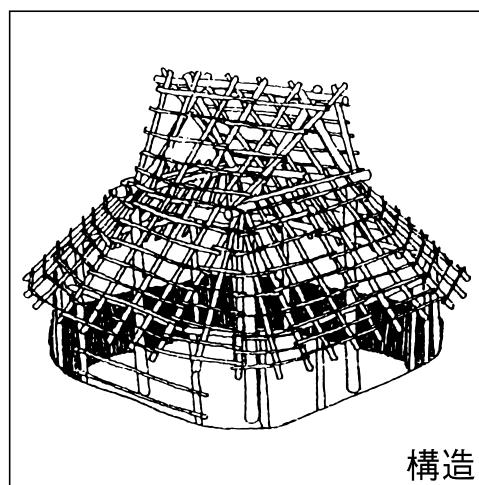
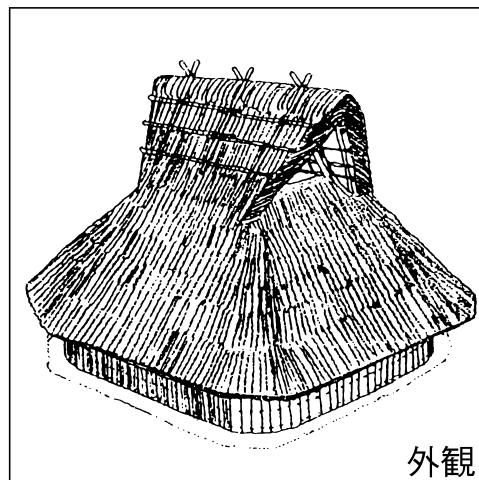
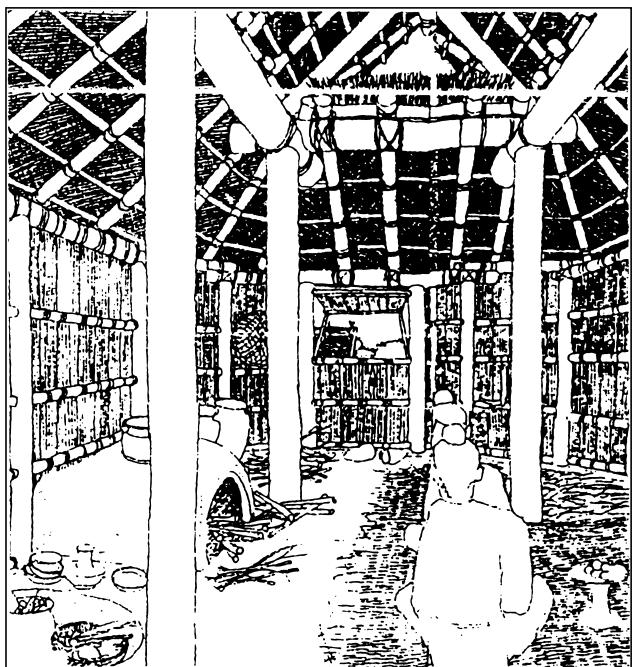
①弥生土器 (後期) ②③土師器
④須恵器
(橋目中・伊奈義文氏 藏)

(二) 小針遺跡

平成五年から八年にかけて小針町の遺跡で調査が行われ、たくさんさんの住居跡が見つかりました。縄文時代の中期・晚期（紀元前三～一世紀）から奈良時代（八世紀）にかけてあつた竪穴住居の跡です。住居跡は、二百九十八けんも見つかりました。建てかえなどを考えると、実際は二、三十けんの集落であつたと思われます。

特に古墳時代後期（六～七世紀）から奈良時代の竪穴住居は、隅が丸くなつた正方形の形に地面を掘り、その中に柱を四本立てて、屋根をかけていました。また、部屋のかべのそばには、かまどがつくりられていました。住居の中からは、須恵器（高温で焼かれたかたい焼き物）や土師器（低温で焼かれた土器）の破片が出土しています。

矢作川ぞいの碧海台地には大規模な集落がたくさんありました。その中でも、



竪穴住居の中のようす（上）

こうぞう
構造

がいかん
外觀

（「古代の村 古代日本を発掘する6」より）



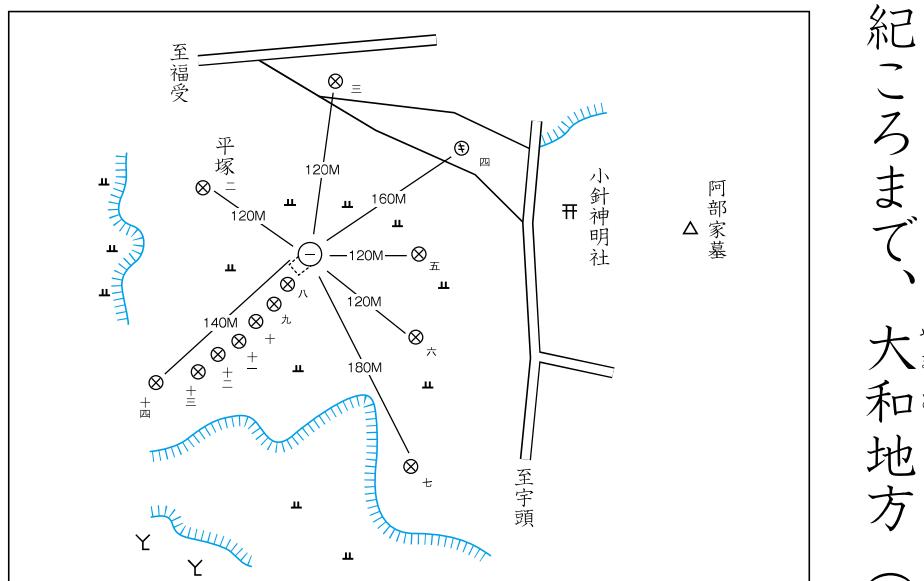
はっくつ
こばりいせき
じゅうきょあと
発掘された小針遺跡（住居跡）

この小針遺跡は古墳時代のものにしては一番大きなものの一つです。

(三) 小針一号古墳ができたころ

三世紀（今から約千八百年前）から始まつて七世紀ころまで、大和地方（今の奈良県）を中心に、大きな豪族のお墓である古墳がさかんにつくられました。

わたしたちの学区は、矢作川流域でも古墳の多くあります。学区の古墳群は、小針古墳群、橋目荒居古墳群、北野古墳群の三つに分けられます。その多くは、台地上に分布し、町が開けるにしたがつてくずされました。現在も残っているもつとも大きい古墳が小針一号古墳です。

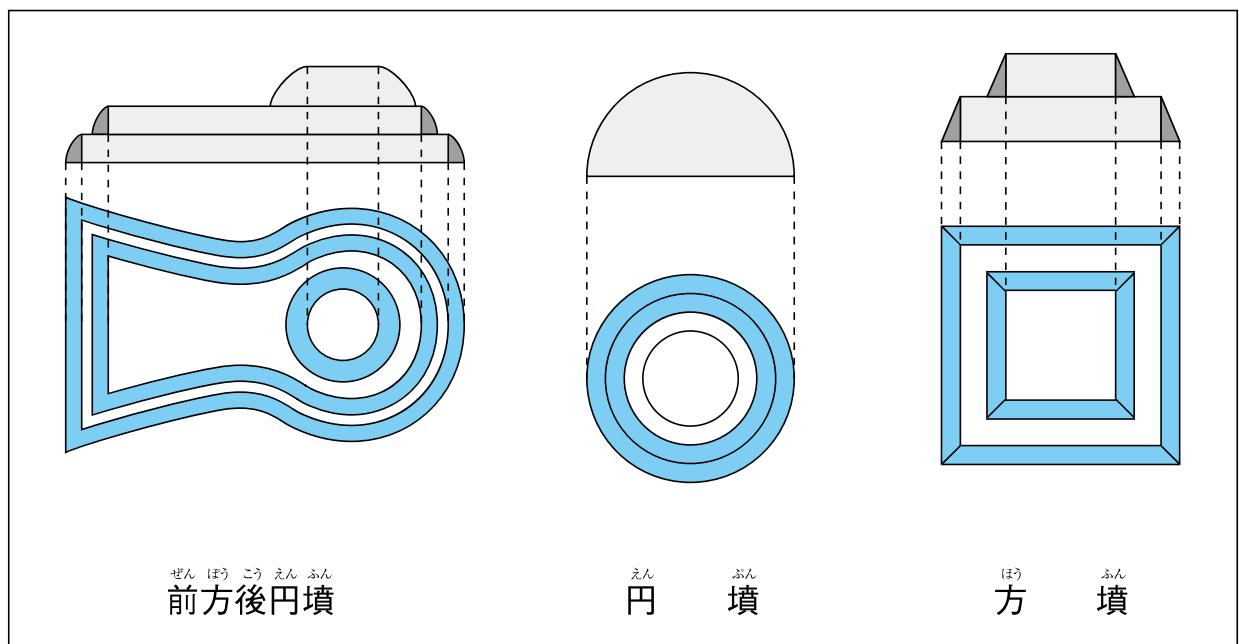


小針古墳群の分布図（矢作町誌より）



小針一号古墳

小針の台地には、小針一号古墳とよばれる前方後円墳をとりまして、十四の円墳が放射状にならんでいました。一号古墳の前方部は、明治のころにこわされたのろにこわされたので今は円墳状になりました。三菱公園の中には、大友皇子の墓は、大友皇子の墓であると書かれてあります。一号古墳のかたわらに立つ掲示板には、大友皇子の墓



古墳の種類

いろいろな説があるようです。

小針古墳群の配列は、たいへん興味深く、
二号墳以下は一号墳に関係のある人の墓で
あつたと思われます。



猿投塚古墳

橋目中町にも小針一号古墳と同じころのも
のと思われる猿投塚
古墳が残つていま
す。猿投塚古墳は、
椀かし塚ともよばれ
ていたともいわれ、
人々に親しまれてき
ました。

むかし、塚の頂には、大木の松が
立つていました。ある時、村人が法
事でお椀が足りなくて困つてている
と、この松が口をきいてお椀を出し
てくれました。

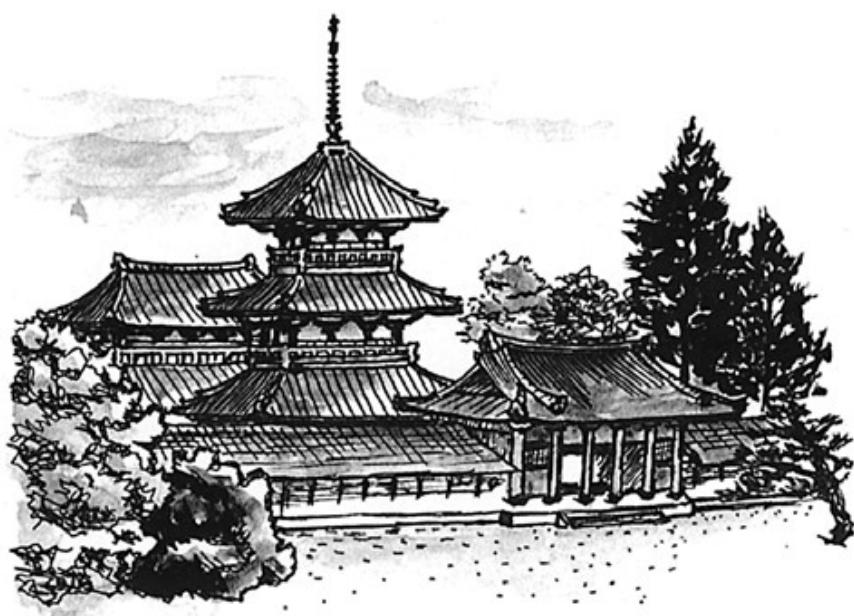
それ以来、法事などでお椀が足り
ない時、この塚にきて松にたのむと、
次の日には決まって必要なだけお椀
がならんでいました。村の人は、た
いそう便利に思い、大切に使つてい
ました。

ところがある時、村に心の悪いお
ばあさんがいて、借りたお椀を返し
ませんでした。それから後は、いく
らのんでも二度とお椀は出できま
せんでした。

矢作地区には、その他にも五十狭城入彦命の墓や、現在はこわされて残つていませんが宇頭一号古墳という大きな古墳もありました。この地方は、西三河でもつとも勢力のある豪族がいて、小国家があつたと思われます。やがて、大和の王朝に支配されていきました。

(四) 北野廃寺ができたころ

五百三十八年に日本に仏教が伝えられて以来、仏教は大和地方を中心にして他の地方に広がつていきました。また、寺院建築の技術も伝えられました。仏教の広がりにともなつて、七世紀後半になると、他の地方にも大和地方にならつて寺院が建てられるようになりました。



北野廃寺想像図



復元された講堂礎石跡

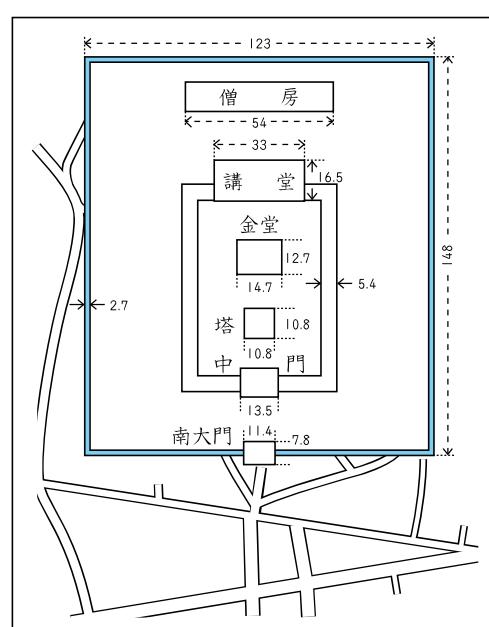
北野廢寺は、このもつとも早い時期に建てられた寺院の一つです。昭和三十九年（一九六四）に行われた調査では、七世紀後半の白鳳時代に建てられ、約百年のあと火事などでなくなつたといわれています。

寺院の配置は、この地方ではめずらしい四天王寺式で、中門、塔、金堂、講堂、僧坊が南北に一直線にならんでいます。

現在は、塔をささえた礎石が残つてゐるだけです。

当時は、東西百二十三メートル、南北百四十八メートルにおよぶ大規模なものだつたと思われます。

境内には、三十メートルに達する三重の塔とも五重



北野廢寺見取図

の塔とも想像される美しい塔が建つていました。當時の人々は、青い屋根瓦、朱ぬりの柱、白いかべの建て物にはこらしさを感じたでしょう。

真福寺のいい伝えによると、北野廃寺は、物部守屋の子孫、物部真福が建てたものといわれています。物部氏一族の勢力が、どのくらい三河地方におよ



泥塔(上), 塼仏(下)

んでいたのか、まだよくわかつていません。しかし矢作川をわたる大切な交通路で、豊かな矢作川の恵みによつて、富と力を持ち、大和の王朝と深く結びついた豪族がいて、愛知県内で一番古くて大きい寺院を建てたことは、確かなことだと思われます。



丸瓦と平瓦

寺院の跡から、たくさんの瓦（丸瓦・平瓦）が発掘されました。軒瓦の他にも泥塔、埠仏なども発掘されました。

瓦は、仏教といつしょに大陸から伝わってきたものです。そのころ、地方で瓦を使つて屋根をふいたのは、ほとんど寺だけでした。

長方形の平瓦を一面にならべ、その継ぎ目に竹を割つたような形の丸瓦をのせます。こうした屋根を本瓦ぶきといい、平瓦と丸瓦の裏には、目のあらい麻布をおしつけた跡があります。これを布目瓦とよんでいます。

軒先は、もようをつけた瓦でかざります。六枚のハスの花びらを表していて、古代インドで生まれ、仏教



北野小学校の校章



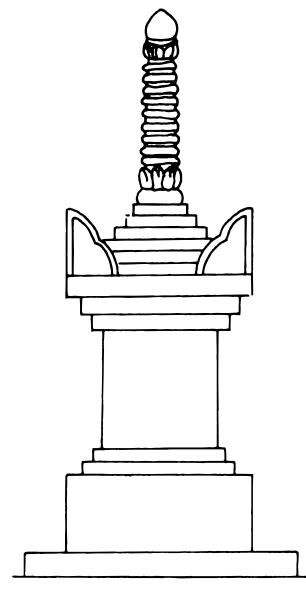
軒丸瓦

とともに日本に伝えられました。日本でも数少ない朝鮮の影きょうを受けた瓦として注目されています。

北野小学校の校章は、この軒丸瓦のもようをデザイン化した格調高いもので

す。

宝 築 印 塔



鎌倉時代以後、武士の墓として五輪塔とともにによく用いられた石塔です。学区では、阿部忠正の墓がこの形式です。

(五) 小針城と白山社

阿部忠正の墓 小針町の神明社の東に、古い石塔が一基、木立ちに囲まれて建つていました。小針町の住宅地整理（小針町区画整理事業）により現在舖越町願照寺に移されています。この石塔は、むかしから小針城主阿部忠正の墓と伝えられています。

阿部忠正という人についてくわしいことはわかり

ませんが、古い記録によると、今から五百年ほど前に小針城を本拠にしていた武将**ぶしょう**であつたことがわかります。

小針城 室町時代の中ごろ、都では、応仁の乱（一四六七～一四七七）といつて何年も戦乱が続いていました。そのころ、この辺りは阿部氏が治めていました。碧海台地のはしに城を構えた阿部氏は、眼下に広がる沖積低地を領民に耕作させていました。小針町にある城跡、本丸、的場、馬々西という地名も、ここに城が築かれていた名残です。台地のはしには、「阿部城内跡」の石碑がひつそりと建つており、むかし町内のほとんどが城であつたといわれています。しかし、その後の開発で城のしきみがほとんどわからなくなってしまったのは残念なことです。小針町の神明社の北側に、小針城の外堀跡が最近まで残つていたこと、小針町の集落の南端に、城の土壘の一部



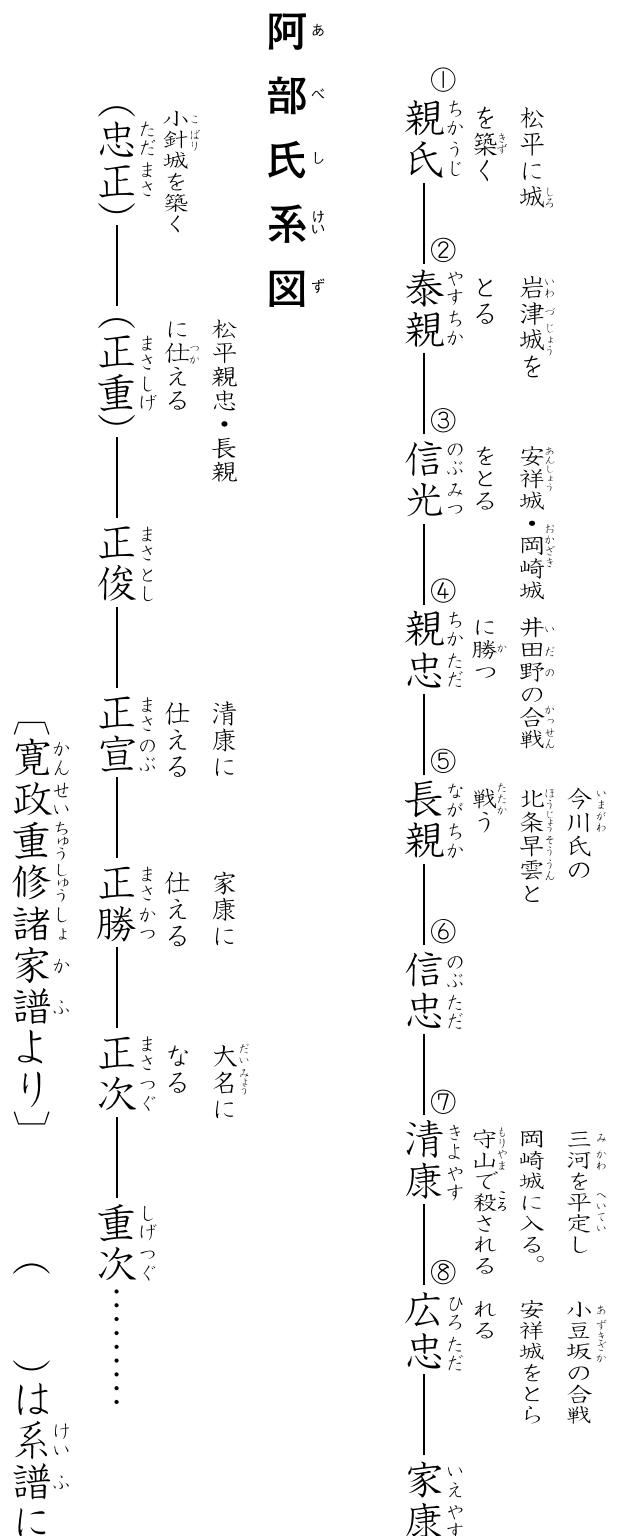
阿部城内跡の石碑

が残つていたと伝えられているのが、わずかな手がかりです。

阿部氏の発展

室町時代の中ごろ、松平郷から岩津に進出した松平三代信光は、岩津城を中心に周囲に力を伸ばしてきました。文明三年（一四七一）には矢作川をこえて、安祥城を攻げきして手に入れることに成功しました。父信光から

松平氏系図



安祥城をゆずられた親忠のもとには、まわりの武士たちがかけつけ家来となりました。阿部城主の阿部忠正も子の正重を安祥城に送り、家来にさせました。

それからは、阿部氏は、松平氏の大切な家来として重く用いられて活躍しました。四代親忠の時の井田野の合戦や、五代長親の時の今川軍による三河攻めの際に働き、松平氏の危機を救いました。徳川家康の代には、阿部正勝、正次が仕え活躍したので、正次は大名になりました。こうして阿部氏は大名として江戸幕府をささえていきました。

岡崎市の姉妹都市に、広島県の福山市があります。福山市にある福山城は、阿部忠正の子孫が城主になつて治めました。

阿部氏と舳越願照寺 舟越町にある願照寺には阿部氏四代の墓がまつられています。願照



阿部氏四代の墓（舳越町願照寺）

寺は、鎌倉時代の中ごろから淨土真宗のお寺となり栄えていました。十五世紀以後、阿部氏代々を供養するお寺となりました。

山田源内と白山社

小針城の阿部氏がまだ若い家康に仕えていた戦国時代に、

橋目へ一人の侍がやつてきました。その人の名

は、山田源内といいます。源内は加賀の国（今

の石川県）の侍でした。源内は、橋目に座敷城

をつくり、ここを居城としました。

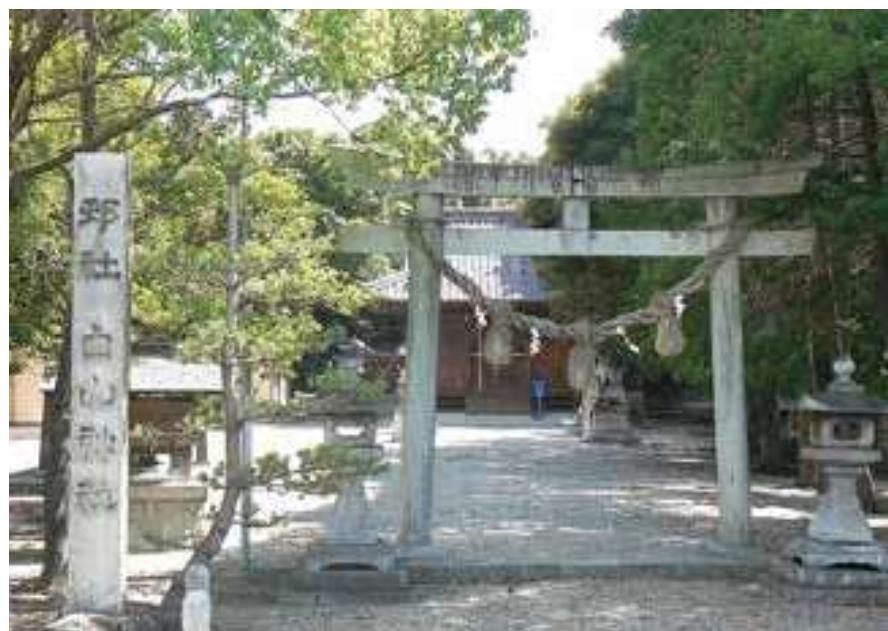
加賀の国の白山社を氏神としていた源内は、

座敷城の前に白山社をつくってまつりました。

学校の南にある白山社はこのときにできたもの

です。源内が亡くなると、墓として石塔を城の

西に建てたという説がありますがはつきりした



山田源内がまつった白山社

検地や刀狩りは、こうした農民から武器を取り上げるとともに、武士と農民の身分をはつきりと区別し、自分の土地から勝手にはなれることができないようになりますでした。



山田源内の墓として建てたといわれる石塔（学校南東）

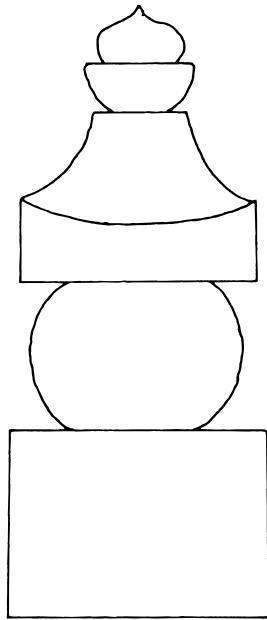
ことはわかりません。源内の子孫は農民となり、代々橋目村の庄屋をつとめました。江戸時代の初めからは、母方の姓である永田となりました。

源内の生きた時代は、いざ戦いとなると農民も武装をし戦場に出かけました。小針城の阿部氏とともに小針の農民が戦場へ出かけたように、源内とともに橋目の農民も戦場に出かけたことでした。このように、この時代は農民と武士とは、はつきりとした区別がありませんでした。豊臣秀吉の

源内が亡くなつたのはいつかよくわかつていませんが、孫の源七は天正元年（一五七三）から庄屋をつとめたら、古い記録にありますから、このころからしだいに農民としての身分がかたまつていつたのでしよう。小針の阿部氏は、武士のまま戦国時代を生きぬき、やがて大名になつていつたのと対照的です。

五輪塔

鎌倉時代以後、武士の墓として、宝篋印塔とともによく用いられた石塔です。



山田氏系図

……現在に

山田源内—助右衛門—源七—五郎左衛門

信長に仕える
のながつかれる

天正元年
てんしょう

より庄屋
よしやう

をつとめる
のとめる

甥
わね

永田姓になる
ながたせいになる



山田源内の碑（白山社内）

(六) 農民のくらしと「孝子利右衛門」

江戸時代の農民のくらしは、たいへんきびしいものでした。農民は、農村を勝手にはなれることは許されませんでした。幕府は、農民に対してしばしば御

慶安の御触書 (一六四九年)

触書を出しました。それには農民の日常生活について

一、朝は早起きして草をか

り、昼は田畠を耕し、晩

にはなわをない、俵を編み、おこたりなく仕事を

しくばっせられまし

一、酒、茶を買って飲んで

はいけない。

一、百姓はつねづね雑こく

を食べ米を多く食べない

ようにせよ。

一、衣類は、麻、木綿のほかは着てはならない。

て、細かいきまりが定めてありました。このきまりを守らなかつたり、年貢を納めなかつたりすると、きびしくばっせられました。農民は、五公五



「孝子利右衛門」の碑（北野町）

いろいろ負担が加わることもありました。

北野村の農民のくらしも、また、たいへんきびしいものでした。そのような中で、北野に住む利右衛門とその姉のとめは、領主から賞をもらいました。

「孝子利右衛門」とよばれるくらい親孝行な息子でした。利右衛門の家は、たいへん貧乏で老母と三人でくらしていました。利右衛門は、いつも母を敬い、親切にしていました。とめは、嫁入りもしないで母のために孝行しました。

領主は、二人を親孝行の手本であるとして、賞をあたえてほめました。北野町にある石碑には、下のようなことが書かれています。

碑文の要約

寒い時には、自分の着ている着物をぬいで母に着せ、食事の時は、母によいものを食べさせ、母が食べ始めるまで二人は食べないで待っている。

貧乏で苦しい生活をしていても、だれ一人不平不満を言わず仲良くし、老母の心をなぐさめていた。

農作業にも精を出して働いた。税と年貢なども決められた通りに納めた。村じゅうの田畠もよく見てまわり、仕事がおくれている家の田畠があると、だまつて農作業を手伝っていた。

(七) 戦争と長瀬山の開こん

永田国三郎、太田銀松の碑 明治三十七年（一九〇四）、日本はロシアに対し宣戦を布告しました。日露戦争（一九〇四～一九〇五）の始まりです。

当時、まだ世界の中でおくれた国であつた日本は、一日も早くヨーロッパ諸国に追いつこうと、技術と文化を学ぶとともに、富国強兵政策をとり、強い國づくりに努力していました。世界の強国ロシアと戦えば、絶対にロシアが勝つと世界の人々が思っていたなかで、戦つたのです。

永田国三郎も、日露戦争で活躍した兵士の一人でした。激しい南山の戦い（遼東半島）で、敵弾に当たり、二十三才の若さで亡くなつたと墓に記されています。

明治三十七年（一九〇四）五月十五日、日



永田国三郎の墓（橋目中町）

本のほころもつとも進んだ戦艦初瀬号がロシア軍のしかけた機雷にふれ、しずみました。初瀬号とともに、水兵であつた太田銀松も戦死しました。

この石碑の太田銀松は、「孝子利右衛門」の子孫で、明治十三年（一八八〇）二月に北野で生まれました。「明治三十三年（一九〇〇）に海軍に入隊し、横須賀の海兵团できびしい訓練を受け、四年後には、帝国海軍旗艦初瀬号に乗りこみ、活躍した」と墓に書かれています。

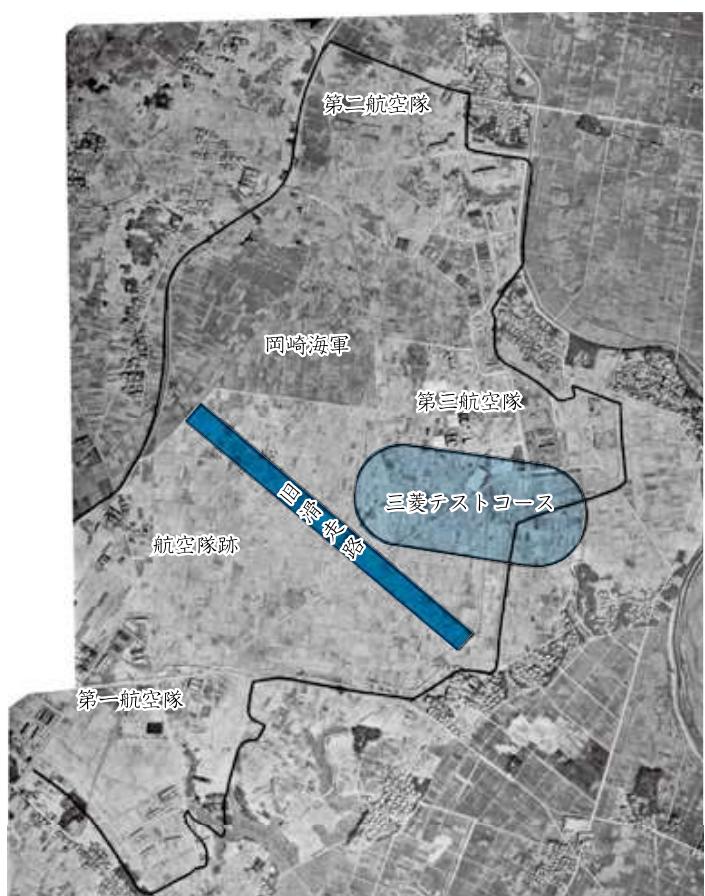
わたしたちの学区では、永田国三郎、太田銀松、鈴木徳次郎が日露戦争のために亡くなりました。このことは、明治政府のおし進めた徵兵令の影響が、学区にまでおよんでいたことを示しています。



太田銀松の墓（北野町）

戦争時代のくらし　日本は昭和十二年（一九三七）、北京の近くで、中国軍としょ
うとつしたのをきっかけに、中国と戦争を始めました。この戦争を日中戦争と
いいます。昭和十六年（一九四一）には、日本はアメリカ、イギリスなどの国々
とも戦争を始めました。東南アジアや太平洋が戦場となつたので、太平洋戦争と
とよんでいます。

戦争が激しくなつたころ、現在の
三菱自動車工業の辺りに岡崎海軍航
空隊の飛行場をつくることになりま
した。この辺りは、もともと長瀬山
とよばれ、松林とあれ地でした。昭
和八年（一九三三）ごろから食料増
産の目的で、耕地整理が始まり、長



戦争時につくられた飛行場と滑走路の位置

瀬山の開こんも進められました。やつと耕地として整つたところの昭和十七年（一九四二）暮れに買収の話があり、測量しながら工事が進められました。当時、西之新郷（現在、三菱自動車の組み立て工場が建つてある辺り）に五けんの家がありましたが、飛行場をつくるために、三げんは小針町へ、二けんは豊田市へ移されました。

昭和十八年（一九四三）には一里（約四キロメートル）四方の飛行場が完成し、昭和十九年（一九四四）初めには飛行場では、通称「赤とんぼ」といわれている練習機が飛びました。学区に飛行場があるため、敵機の空しゅうもたびたび受けました。学区には、爆弾で家が壊されたり、焼けたりもしました。

「孝子利右衛門」の碑の近くに大きな一本松が立っていましたが、この一本松



長瀬山開発の記念碑（北野町）

が敵機の目標になるということで、みんなで相談をしてその松を切りました。

学区からも多くの人々が戦争に行きました。残された人々も兵器をつくる工場へ働きに行つたりしました。当時、農村に住む人々の最大の使命が食糧増産でした。しかし、働き手となる男の人は、戦場や兵器工場にとられ、年寄り、女人や子どもで米づくりに精を出しました。取られた米の大部分は、国のために安い値段で供出しました。そのため、人々の暮らしは、決して楽なものではありませんでした。食糧増産に努めながら、裏作（麦・菜種）にも力を入れ、やつ

てから三回も引っ越しをしました。

一回目の引っ越しは、昭和十七年でした。岡崎海軍航空隊の飛行場をつくるということで、強制的に豊田の方へ移転しました。このときは、お国のために土地を売ったので勤労奉仕の人々がお手伝いしてくれたそうです。

二回目は、昭和三十二年。飛行場跡地を払い下げてもらい、再びもとのところにもどつて農業の多角経営をめざしていました。

ところが、三菱自動車の誘致が決まり、土地の買収が始まりました。竹内さんは、学区の発展のために土地を手ばなし、昭和四十二年に現在のところへ移つてきました。

国や市の政策のために、竹内さんは三回も引っ越し、現在にいたっています。

三回も引っ越しをした竹内勲さん

橋目町新屋敷の竹内さんは、物心つい

てから三回も引っ越しをしました。

た。岡崎海軍航空隊の飛行場をつくると

いうことで、強制的に豊田の方へ移転し

ました。このときは、お国のために土地

を売ったので勤労奉仕の人々がお手伝い

してくれたそうです。

二回目は、昭和三十二年。飛行場跡地を払い下げてもらい、再びもとのところ

にもどつて農業の多角経営をめざしてい

ました。

ところが、三菱自動車の誘致が決まり、

土地の買収が始まりました。竹内さんは、

学区の発展のために土地を手ばなし、昭

和四十二年に現在のところへ移つてきま

した。

国や市の政策のために、竹内さんは三回も引っ越し、現在にいたっています。

と生活できるというくらしでした。

昭和二十年（一九四五）八月十五日、長かつた戦争もやつと終わりました。戦後、飛行場だつた広い土地は、もとの地主を中心にお払い下げられました。滑走路や兵舎で踏み固められた土地も、人々の努力によつて再び水田や畠に変わつていきました。

(八) 大工場の誘致と住宅の増加

昭和三十年（一九五五）、それまで碧海郡矢作町だつた学区は、国の市町村合併の方針により岡崎市に合併しました。それ以後、矢作地区へ多くの工場が進出するようになりました。

昭和三十五年（一九六〇）には、戦時中の飛行場跡地に現在の三菱自動車工業が誘致されることに決まり、約百町歩（百ヘクタール）の土地が買収され、

三年後には、テストコースに変わりました。

それらの工場の進出にともなつて、学区の様子も大きく変わつていきました。学区の機械化も進み、兼業農家が増えました。北野町や橋目中町に次々と新しい住宅が建ち並びました。それ以前は農業中心であつた学区は、製造工場の進出とともに、工業地域やそれとともになう住宅地域へと変化してきました。昭和四十年代には、電気製品や自動車などがどの家にも入り、くらしはますます便利になつてきました。特に自動車の普及がめざましく、それにともなつて、道路の整備も進みました。学区を通る平針街道（主要地方道・名古屋岡崎線）、上郷

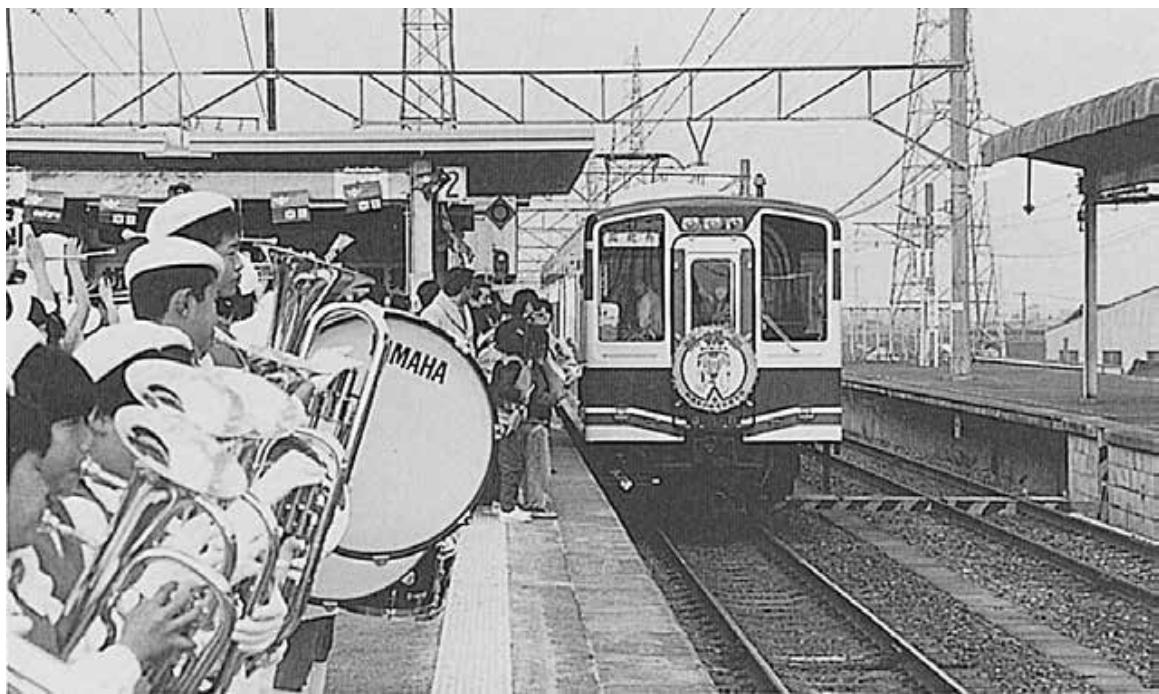


学区の航空写真（平成 26 年）

線（県道豊田西尾線）は、岡崎と名古屋・豊田をつなぐ重要な道路です。

昭和六十三年（一九八八）一月には、愛知環状鉄道が開業しました。これによつて、岡崎と高蔵寺（春日井市）が結ばれました。この日は、北野小学校の鼓笛隊やバトン隊も参加して、開業を祝いました。

このように、産業、経済が急速な伸びを見せ始めると、岡崎市の人口が増え、学区の人口も昭和四十八年（一九七三）を境に急激に増えてきました。交通網の整備にともない学区の人口はさらに増えていきました。



愛知環状鉄道開業式（昭和 63 年 1 月 30 日）